



異世界

魔王

サキュバス

R-18
ADULT ONLY

SUCCUBUS
ORIGINAL
BOOK

cocoa
holic
by Yuizaki Kazuya,
since 2010



異世界

[different world]

魔王

[the Princess of
Darkness [Evil]]



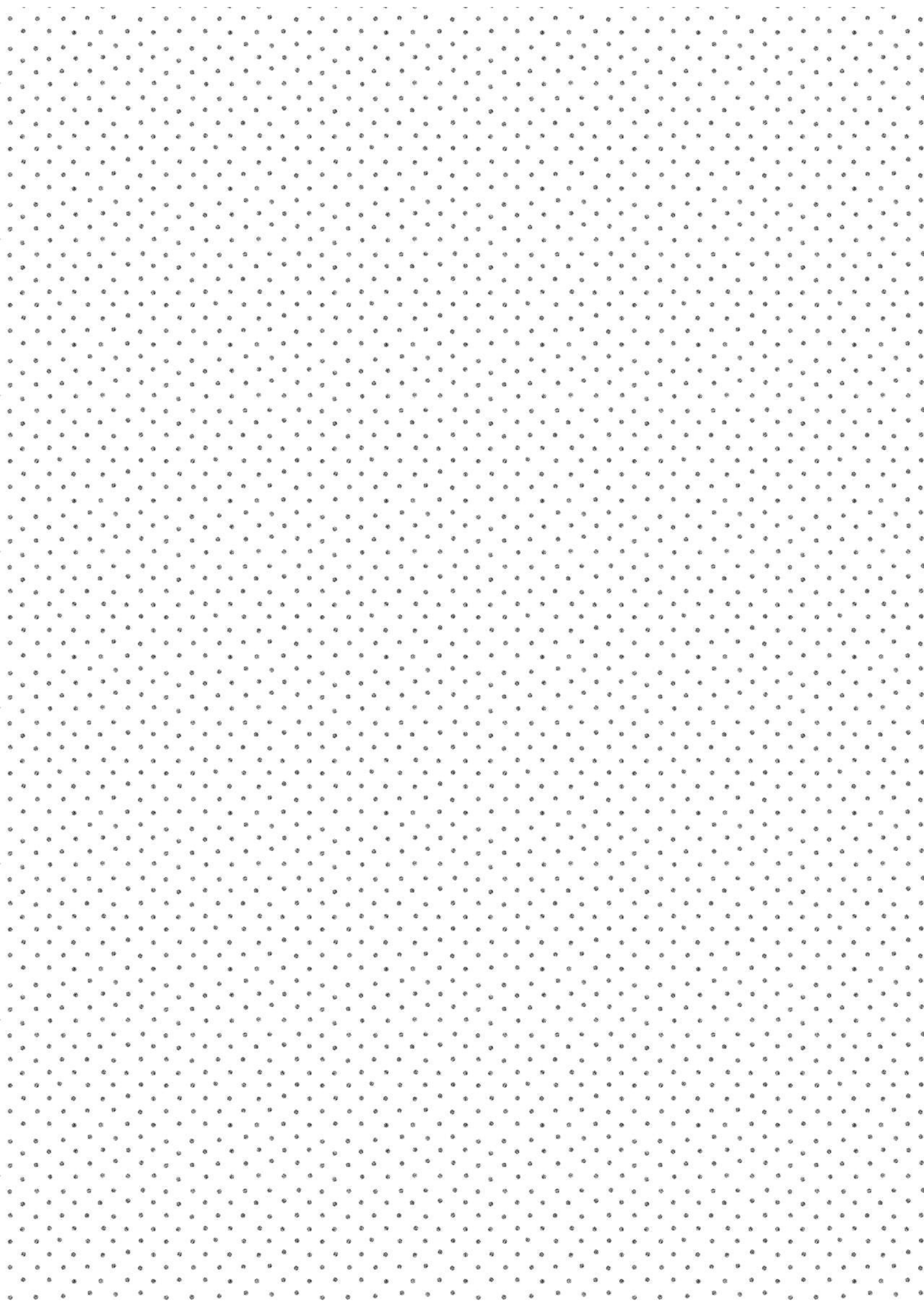
[Succubus]

サキュバス



cocoa
holic
by Yuizaki Kazuya,
since 2010







魔王

覚悟しろ

今ここで全てに
決着をつける



では来い
馬の骨

このアストレアを
統べる魔王
エルザマリスが直々に

：陳腐な
余興よの

下僕風情が
古に謳われた
勇者きどりか？

さあな

なあ今日の
晩飯はシチュー
なんだ

御託は
いいから早く
終結らせようぜ

くくく…
死に急ぐ
その意気や良し

貴様の実力を
見定めてやるわ…



あーっ!!

んんん?
どうした
魔王さま?

ぬあああっ!

エクス
プロージョンっ

下僕にガツされて
今どんな気持ち?

なんでじゃ
アホたれえーっ!?

エクス
プロージョンっ!!



ぐぬううう
またじゃっ

なんで出ん
のじゃーっ!?

えっコ?
実力が足り
ないんじや
ないのおく?

アストリアを
統べる
魔王ちゃん(笑)

いーから離せ
うまのほねっ

えっち!

へんたいっ
こーっ



今回も
魔王さまの負け
つてこといい?

おうっ...

...とびきりです

エクス
プロージョン
(物理)

んじよも

あのね：
これはあくまで彼に
魔法が通用するかの
検証だから

普通にボコるのは
反則だよ？

は、い、く、う、

そんな
わかっておるわ：

じゃが余は
気に入らぬ！

異世界から捧げられた
下僕と聞いて期待して
おればこのアホたれっ

全然余のこと
崇めんし子供扱い
しよるしっ

良いか！？
年齢はともかく
余は立派な淑女：

毎晩寝る前に
クマさんと会話
してるのに？

……
おい貴様どこで
それを知った？

ああもう
また
ですかっ！

あえてタイトルを
付けるなら――

『バイト先の異世界が
魔族サイドロリハレムで
ご都合ラブコメ展開
すぎる！』……ってか？

お願いですがら
いい加減に
仲良くして
くださいーっ！！



ゆるめのファンタジーで
命の危険もない
余計な男キャラも
年増キャラも出てこない

えっちなじゃない
現環境上最強の
SSR異世界だ…



タイトルセンスの
良し悪しはともかく
異世界ガチャは
大成功だった



…とはいえ
恵まれ過ぎるのも
逆にしんどいよな

はあ…

特に魔王とかいう
のじゃろり！

あんな服着て
サキユバスらしく
淫紋まで付けてる癖に
中身がおこちゃまとか
ちんちんに悪すぎる！

アイツ俺がどんだけ
勃起バシないように
してるかぜって！
知らねえだろ！

紳士ぶって
エロ展開を我慢する
生活も実際ツライ

アマネに内緒で薄い本
持ち込んだのは
正解だったぜ

はあ…できればもう
少しだけ股間に優しい
異世界だったらなあ

そうたとえば
こんな時には…

ほう…
なんじゃ?

気まぐれに
遊びに来てみれば
…まったく

貴様こんな絵で
独りさみしく
発散させとるのか?

そんな貴様のために
余がわざわざ手伝いに
来てやったのだぞ♡

ふふん♪

ありがたく
思うがよい♡

あー…うん!!
そうそう!!

魔王ちゃんに
関してはそんな感じ!



仕方ない
ヤツめ♡

余の身体を
狙っておったなら
初めから素直に媚びて
おけば良いものを

おかげでこんなに
大きくなっておる
ではないか♡

まんっ!?



こんな生意気な
棒には相応の罰を
与えてやらねばな♡

ま魔王ッ!
お前それは罰じゃ
なくてごほうびッ

?

…じゃなくて!
いやッッッが
色々見えて…!!



丸見えなのは
穿いてないから
当たり前じゃろ?

ほれ♡

こういうの
好きなんじゃろ
貴様は♡

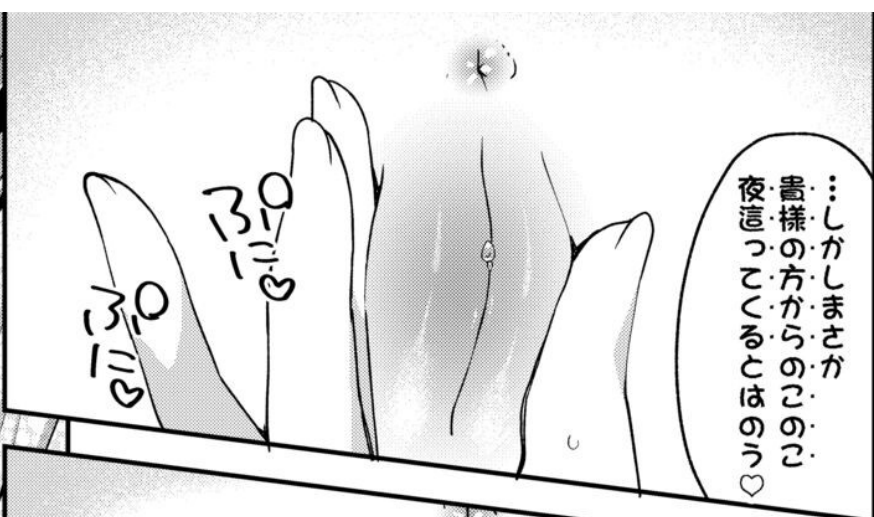
…何を言うて
おるのじゃ?

はい
大好きです!
…じゃなくてっ



あれ...
いつの間に宿じゃ...

どこだ...
魔王の...寝室？



...しかしまさか
書様の方からのこのこ
夜這ってくるとはもう♡



...えっ？

みせ...

いじましい
下僕め♡
さあがの余とて
そこまご求められたら
応えぬわけには
いかんじやろうが♡



いま貴様



いや...待てよ
何かおかしい

これは俺の妄想の
はずだろ？

映像にしても
触感にしてみても

こんなデイトールの
ある妄想なんて
出来るわけ

...いま

—これが妄想ど
思ってたな♡

貴様
まさか

余が何者か
忘れたわけでは
あるまいな？

魔法が効きにくい
貴様の体質のせい
で難儀こそしたが
今宵は満月！

はー？

コイツは
さつきから
何を言ってる

理解が及ばぬか？
…まあせいぜい
考えるがよい

その身に一体
何が起こつて
おるのかを

妄想と現実の壁を
取り払う程度は
造作なきことよ♡

…まあ
もつとも

考えるような
余裕など

むざむざ与えて
やるつもりも
ないがの♡

…ッ！！

ハッ
ハッ
ハッ

これ—
まさか全部
コイツの魔法で…!

ほう♪
ここまでしても
まだ頭が回るのか

ほとほと見上げた
魔法耐性じゃ

じゃが魔法がどうか
現実がどうか
そんな退屈な話より

貴様が欲しいのは
おっぱいじゃろ?

…のう?

心も
読まれて…

これもしかして
ヤバい…!

そんなに小さな
ちくびが好き
なのか書様は?

この
ど変態♡

サキユバスの
おっぱいって
メIIブルみたいな
味がするんだ…!

初いやつめ♡

うわっ!
すげえ甘い…!





ふふ…
甘いかな？

異世界出身の
書様のことじゃ
サキユバスの蜜など
初めてじやろう♡

あっ♡ころっ♡
夢中なのは良いが
そんな犬みたいに
吸い付くでないっ♡

乱暴にされたら
すぐに来てしまう
じゃろう…んっ♡





のうっ♡
貴様っ♡

つくづく
生意気じゃなっ♡

この期に及んで
まだカッコ付けて
体裁を保とうと
しておるのかっ？

正直に言えば
良いじゃろっ♡

貴様の考えなど
とっくに全部
バレておるぞっ♡

がっちがちに
熱くて凶悪な
おとなちゃんぽをつ

せまあい穴に
無理やりぐりぐり
押し込んでっ

ふかふかぬくぬくな
子宮の奥まで
びゅー♡びゅー♡
…って♡

ブチまけたくて
たまらないって♡





うっ……ぐ……!!

……ほら
サボっている余裕
などないぞっ
もっと
がんばって余を
満足させい♡

おお……♡
来た……あ……!

魔……お……
はあっ……
エ……

リス……っ

なんでっ……
こんな……っ

……
エリスか……

エリス♡
うむっ
貴様にしては良い
呼び名じゃ♡

…ダメだつ
このままじゃ
俺のおさまりが
つかねえっ

あせ

っ!?

何を勝手に
動き始めて
おるのじゃっ!?

余は許可など
してないぞっ

つたくさんさ
好き勝手にしてくれ
やがって…!!

やめろッ

言うこと聞けっ
思った通りに
動けバカっ♡

魅了に
逆らうなあっ

あつもうつ
魔王ちゃん
たまねえっ

しがもっ
これっ♡

なんか余まで
正気に戻ってき
おるしっ♡

貴様いったい
何したんじゃあ…♡

もはや
ふだん通りにただ
可愛いだけかよっ

知らねえよ!
なんかいつの間にか
普通に動けるように
なってるんだよっ









こんにちは、ユイザキです。

今回はあんまり小難しいお話ではなくライトな感じで。
たまにはこういうのも描きたくなるんですよ…(°ω°)
サキュバスちゃんも男もあまり描かないタイプなので楽しかったです。

……誰であれどんな種であれ。
魔族というイキモノは多かれ少なかれ、自らの命に《業》を抱えている。

私たちはそんな面倒なイキモノとして、遙か昔に偉そうぶってたどっかの誰かにつくられた。

——たとえば、サキュバス。彼女たちは元々は、『魔力の自己増幅を伴った発情』という《業》を持つ種族だった。

繁殖期だけではなく、生命の危機を感じた時とくに無意識のうちに発動し、目の前のオスを幻惑や魅了をはじめとした強力な精神干渉魔法で屈服させ、半ば強制的に子種を搾取することで相手の戦意を失わせる、そんな機能。

それは、あらゆる哺乳類のオスからサキュバス個体の受精を可能とする彼女たちにとっては、群れをなさないまま外敵から自己防衛を行い、かつ自らの血を確実に繋いでいくために備わっていた、いわば進化論的安全装置だった……とされている。

これはあくまで有史以前、伝承と風聞混じりの記録すらろくに残っていないようなはるか過去の話であって、もしかしたらそうだったのかもね、程度の話でしかないのだけど。

それでも自分の意思に関わらず、相手すらも選ばずそういう気分や行為に至ってしまうなんて、本人たちにとってみればほんと厄介な機能だったんじゃないかなあ、と思う。幸いなことに、そんな面倒な《業》も時代をくだって他種族との交配を重ね、ひたすらに血を混じらせ続けていくうちに、さほど問題にはならなくなっていくた。

少なくとも、汎魔族国家——今のアストレアの原型となる国が成立した頃くらいには、性欲抑制剤の助けを借りれば問題なく汎魔族社会の一員としてやっていける程度には、まあなっていた。とりあえず、普通のサキュバスは……ね。

……つまり、物事には例外があるってこと。

これはサキュバスだけじゃなくて、すべての魔族に共通して言えることなのだけれど、私たちの中でごく稀に、種としての《業》を極端に強く示す者が生まれてしまうことがある。

どんな感じって、ええと……山ひとつを腕一本で動かすような筋力が生まれ付き備わっていたり、今までのどんな系統にも属さない異常な魔法をいきなり操れたりとか？

逆に激し過ぎる副作用を挙げるならば、物心つく頃には既に理性を失っていたり、本来あるべき身体のパーツが無かったりとか。

まあ……たとえば、脳とか。

もつともそのほとんどは、幼いうちに自らの《業》に潰されて『幸運にも』夭折してしまうんだけど、その中に更なる例外として『不運にも』生き残ってしまう例っていうのもやっぱり現れる。現れてしまう。

そんな、不幸に不幸を重ねた《業》の産物。

他の誰よりも純粋な魔力の塊にして、ともすれば文明の制御下を脱して暴走し、この大陸を絶滅の果てに追いやりかねない、時代によつてはかつて亜大陸に存在した人類による帝政国家との間で勃発した大戦役の行方を単体で決定つけさえもした、生ける戦略級魔法兵器。

——私たちはそれを、『魔王』と呼んでいる。

オーガであった先代のバルタザル様しかり、当代のエルザマリスちゃん……様も、またしかり。

あの子の場合は特段にひどかった。
よりにもよって元々から『魔力増幅』の《業》を抱えるサキュバスがさらに魔王性を有してしまったばかりに、その始末は最悪だった。

すべて戴冠当初から危惧されていたまさにその通りに、状況は悪化していった。

毎晩のように起こす発情発作と、それに伴った魔力暴走の勢いは、あの子の身体や魂が『女の子』に近づいていくにしたがって、破滅的な勢いで加速していった。止まない雷に打たれ続けて森が燃え広がっていくように、魔力の内圧は無際限に無秩序に上昇し続けていた。

誰にも止められなかった。

性欲抑制剤なんてもはや何の役にも立たなかった。あの子自身が有する強い貞操観念の方が、あんな子供騙しの薬なんかより遙かに状況の遅延に寄与していた。

私たちは、歯噛みを続けるしかなかった。

仮にそこら辺を歩いている馬の骨のオスを攫って生贄としてあてがおとしたところで、向こうの大陸で人類が頑張っているプロバガンダみたいな非道で残酷な魔族のイメージどおりに道徳的な問題を全部すっ飛ばしたとして。

夜を十全に満ちたあの子を相手に色々するしない以前に、まず蒸発するまでにその肌に触れられるのかどうか。

アカデミア出身の歴代執政官が丸数年かけて知恵を出し合い続けた結果にしても、間に合わせの次善策として、八人の高位術師による二百五十六種のアッザーフ型封印儀式をもつて、あの子の部屋を夜の間だけ魔法的に隔離閉鎖しておくことがせいぜいだった。

そうこうしているうちに、無理な禁欲と過充填を続けたあの子の人格崩壊は目の前に迫っていた。
そうなればおそらくは、この大陸を焼き尽くしてもなお収まらないレベルの厄災が……、
……。

違う、違うの。

私はいま嘘をついた。

厄災なんてどうだっていいし。
世界なんていつそ滅んだって構わない。

ただ私は、果てのない情欲に苦しみ続けるあの子をこれ以上見ていられなかった。

出来るならば、私が夜伽の相手をしてあげたかった。

あの子が持て余した魔性を、こんな小さな身体で良ければ少しでも受け止めてあげたかった。

たとえこの命が尽き果てたとして、それでもあの子の苦しみが一晩だけこそそこマシになるなら、私はあの子とはじめての情を交わしたかった。
怖くなってなかった。

優しいあの子のことだから、きっと最期の瞬間まで私を愛して逝かせてくれるだろうから。

けれどあの子は、それすらもさせてくれなかった。
賢すぎるのも時に毒じやなど、笑い飛ばされた。

私は無力だった。

あの子の力になるためだけに、私は側近という、あの子の隣にいつ居ても大丈夫な立場まで来たというのに。

ねえ、アマネ。

あなたがあの無駄に大仰な《扉》を通して玉座の間にすっ転んできたのは、丁度そんな時の話だよ。

……現実性共鳴仮説。

あなた達『ゆらぎの国』の人々が主張する、『量子魔術論』において示唆された、可能性。

『《世界の曖昧さを決定づける魔法数》が極度に低い世界に属する存在は、距離の自乗に反比例する強さで対象の静的魔力、ひいては《業》すらも希釈が可能であるかもしれない』……という。

この世界に住む私たちにとってはあまりにも論理が飛躍している、ご都合主義じみたおとぎ話。

そんな降って湧いた最後の蜘蛛の糸に、私は、アストレア執政議院の長老たちは、どうしたのか。

無様にも一目散にすがつた。

あなたのあまりにタイミングの良い、ご都合主義ながらな提案が、どこの馬の骨ともしれない異世界国家からの遠回しな侵略作戦の一環なのかもしれないという危険性を、十分に理解できていたにも関わらず。

私たちは、それだけ追い詰められていた。

さらに言えば、その試みが成功する確信すらなかった。

ただし、根拠ならば僅かながらあった。

古代汎魔族王朝を治めていた当時の《魔王》が、《勇者》を名乗るたった一人の人類の少年に一騎打ちで打ち倒されたという、数千年前起こったとされる伝承上の事件。

最低でも数個師団規模の兵力程度ならば苦もなく薙ぎ払

えたはずの《魔王》が、何故かたった一振りの剣に斃れたという不可解な矛盾は、当時の《勇者》に魔族の《業》を希釈する手段があったという仮定のもとならば解決しえた。

……そんな彼が一体どこから来た何者だったのかは、ともかくとして。

そして私たちは、『魔王朝』『ゆらぎの国』二国間の調停官レベルで交わされた協定に基づき、『魔法なき国』に住む哀れな無辜の民――スガ・ヨータをあの子にであてがった。

文字通り、『魔王』への下僕・供物・生贄として。

……あるいはもししたら、『勇者』として。

そして彼は、生きて制御装置としての役目を果たした。

あの子はきつと救われた、救われていてほしい。

これは私の願望に過ぎない。

彼もあるいは救われた、救われていてほしい。

これも私の願望に過ぎない。

……ねえ、アマネ。

私は、今のあの子にどんな顔をしたらいいのかな。

私は、今の下僕くんは何と声をかけたらいいのかな。

数えきれない恩と裏切りと罪が私の中を駆け巡ってるの。

賢いフリしてても、私やっぱりまだ子供だ。

どうしたらいいのか、わかんないよ。

……。

……アマネ、何を言ってるの。そんな……パンケーキをおかわりしたって、何も変わらないよ？

……。

……そう、かな。

もしそうなら、どれだけいいことなのかもしれない。

何も変わらなくていい。何もなくていい。

そもそも私たちアストレアがあるべき姿に回歸するためのシステムとして、アマネがやってきたということ。

仮に魔族だけじゃなくて、あまねく世界のあらゆるイキモノに《業》があるのだとすれば、それこそがあなたの国の……

エヴェレティアンが抱えている《業》で。

だからそういう面倒くさいことはアマネみたいな専門の人たちに任せて、優雅においしいパンケーキでも食べていようね……って。

……うん。

……うん、そうだね。

やっぱりこんな時でも、パンケーキは美味しい。

私、こんなことすらも久しく忘れていたかもしれない。

ありがとう。私、色々考えてみるね。

考えるのは得意だよ。物心ついてから今この時まで、ずっと繰り返してきたことだから。

改めて言えば、子供らしいことなんて何一つしてこなかった。やらなきゃいけない何かがいつも私の目の前にはあって、いつだってそれに取りかかっているだけで。やっと片付けた頃には既に次の何かを与えられていて。

そんな、今まで当たり前のようにあったものが目の前から突然消えてしまったから、今の私は戸惑っているだけなのかもしれない。

でも、だとするとやっぱり私は、いまの今までずっと、大人のマネっこをしているだけの子供だったのかも。

だって。大人っていうのは自分でやりたいことを選んでいくイキモノでしよう？

私もこれから、ゆっくり大人になっていくと思う。

その手始めにまず、『やるべきこと』じゃなくて『やりたいこと』を自分で考えようと思う。たとえばこれからアマネを通じて異世界間国交を結んでいくにあたって、アストレアの外交使として下僕くんの国に赴いてみるとか。

エヴェレットも勿論だけれど、私たちの国と人々と歴史を救った『魔法なき国』については、もっと直に触れて知る必要がある。

感傷的な意味でもそうだし、実を言えばあちらで魔族に関する逸話が伝説として語られているところが、ちよつとだけ気になる。場合によっては、記録に遺されていない古代アストレアの歴史について、何か得られることがあるかも。

……あ、うん。観光目的は否定しない。

そういう俗物的でワクワクする邪念も………たったの七割ぐらいはあるよ。ほらだって私、まだ子供だもん。

さっきも言ったけど、ららばーとでお買物物がしてみたい。

この体験はきつと、人生初の有給休暇のこれ以上ない有効利用になると思うな。

……？

何を買いたいのかって……それは言わない。黙秘する。ぜ

つたい笑われるから。

……。

絶対に笑わないって約束するなら。

……まずは大きな鏡と。

えつと、あとはホワイトニング………だっけ？

ううん、きつとある。アマネの持ってきたニホンの資料にも写真っていうの？それと一緒にしっかり載せられてた。

すごいんだよ、ニホン。魔法が使えないくせに歯をびっか

びかに白くするなんていう革命的で画期的な技術があるんだよふんすふんす！

……って、ひどい。笑わないって約束したのに！

もう知らない。アマネなんて、明日から三時のおやつ分け

てあげない。今日からパンケーキ抜きね。

ああ。もう、冗談だから。

怒ってないから大丈夫だって。はい、ハンカチ。

こんな辛気臭い顔をしているけど、冗談を言うのは好きな方だから、これからはそういうのにも慣れてよね。

……え。どうしてそんなに欲しいのかって？

何が……って、ホワイトニングか。

別に大した理由じゃないよ。

これからは多少少しは笑える機会も増えるかもしれないなって、ただそれだけ。あなたみたいになあんにも気にせず、ぼわぼわって感じで。うん、ちよつとだけバカにしてる。

えつと、それに何より……うう、恥ずかしい。

ごめん、アマネ。少しかだけ耳を貸して。

……あのね。

私たちの種特有の伝統というか習慣というか、本当に大したことじゃないんだけど。子供の頃から決まって、お母さんにはこう教えられるの。

——恋するヴァンパイアは歯が命だ、って。

Cocoa Holic #35

発行■ココアホリック/ユイザキカズヤ

発行日■初版:2019. 12. 30

二刷:2020. 01. 19

絵■ユイザキカズヤ

話■rk

デザイン■柊鯨さま

スペシャルサンクス■呉・イジス様

<http://c-holic.jp/>
xx_merry@hotmail.com

印刷■サングループ

 **SUN GROUP**
<http://www.sungroup.co.jp/>